

富山大学蹴球部

開学時のこと

1949年(昭24)5月、国立学校設置法により、富山高校(文学部・経済学部)、富山薬専(薬学部)富山師範(教育学部)、高岡工専(工学部)など4高専を統合した富山大学が開学した。1年半の一般教養過程を、全学部の学生が蓮町(現馬場公園)にある旧制富山高校校舎で受講したことが、蹴球部発足の好条件となった。各学部の学生が分散しておれば、1年生のみの少人数では到底部活動はスタートしていなかったであろう。

集まった面々約15名、富山中学出が最も多く、関西大学から豪傑風の名GK濱崎幸寿が入部したのも幸いした。全員彼によってGKのセービングを知った。初代主将藤原弘道をはじめ、正にサッカー狂、登校即部室に集合。和気あいあい、コミュニケーションは最高、だがグラウンドは一面の藪(葦)。連日、鎌・鍬などで開墾作業が続いたが、コート半分がやっと使えるありさまで、練習は専ら各自の母校を転々とする流浪の旅であった。

当時、蹴球はマイナースポーツで、一般(大人)のチームは5指にも未たず、選手層も戦争の影響で高齢化しており、蹴球協会は富大蹴球部に後継者育成の期待を寄せていた。

翌1950年(昭25)第30回全日本蹴球選手権大会(刈谷市)に富山大学が北陸代表として出場、名門志太サッカー(静岡)に1-10で惨敗した。当時、富山県は一般・高校とも北陸では常勝であった。1951年(昭26)第31回大会(仙台)に再

度富大単独チームで出場。島根県代表に0-1で惜敗した。同年開催の広島国体には、藤原、濱崎、島倉法慶(現高野)、西野秀夫、松岡久悦ら5名が富山サッカーの一員として参加している。後、全日本選手権および国体には、富山サッカーのメンバーとして過半数の選手を送ることになる。



五福キャンパスのこと

1952年(昭27)、新設された五福グラウンドで練習が始まった。県内高校卒が主力で、石川県の優秀な選手も加わった。

この頃、ゲームを高所から写真に撮り、ポジションを徹底的に研究した。練習方法・戦術を記した用紙は相当なものになった。練習では回数多くボールに触れるようにした。例えば、RW舟山節夫の1日のセンターリングは100本、それと逆サイドから確実にシュートする練習をした。努力はやがて北陸の雄として開花していく。

しかし、猛練習を支えるボールも必要であった。部費を捻出するために、蓮町キャンパス校門建設の土木作業をサッカー部が2万円で請け負ったこともあった。

それでもボールは不足し、授業用や蹴球協会の中古ボールを払い下げてもらった。中古ボー

ルの確保は後の修繕が大変である。主将兼主務の西野秀夫は、授業をさぼりボールを縫いつづけた。その結果、出席時数不足により蹴球実技の単位を落とすことになる。

他流試合、遠征のこと

北陸の覇者となったこの頃、新しい試合相手を北陸以外の地に求めるようにもなった。最初に選んだのが信州大学である。長野駅に着いたが、信州大学では部員全員に試合のことが通じておらず、慌てて集めてもらって辛うじて試合ができた。

この熱意が他の大学を動かし、1952年(昭27)の北信越大学蹴球交歓会の開催につながったのであるが、残念なことに予算の裏付けがなかった。そこで、参加全大学の宿舎を磯部にある県立女学校研修所「清風荘」にした。

協会役員に無断で、家城博泉会長から賛助金を頂戴した。若気の至りであったが、会長ご夫婦の温かい励ましには今なお頭の下がる思いである。

1952～53年(昭27～28)の北陸三大学選手権には連続完全優勝した。当時の記録が残っていないのが誠に残念である。

1953年正月に、オープン参加で第2回全国大学選手権に出場した。宿舎は中央大学越中県人学生寮であった。東京学芸大学と対戦し1-3で善戦した。得点の1点はLW藤川猛からのボールが敵・味方の間をくぐり抜けた。それを塩谷俊作が決めたものである。3失点のうち1点は自殺点であった。ヘディングすべきボールを藤原が背中でヒールキックし、それが味方ゴールポストぎりぎりのシュートとなり、GK濱崎

のセービングも及ばなかった。正月の東京は寒さが厳しく、霜を踏んでプレーするのは初めての経験であった。許した3点は、霜柱のなせる業だったのだろう。

1955年(昭30)正月には、第4回全国大学選手権大会に再度挑戦した。緑の地に白で「富大」と染め抜いた3m×3mの新調の大応援旗は、寒風にたなびき富山大学の意気をいやがうえにも高めた。ゲームは絵画館前のグラウンドであった。この頃の富大は相当の得点力を持っていた。しかし、相手は後になってメキシコオリンピック3位の八重樫を擁する早稲田大学であった。先取得点はLW藤川からのセンターリングをCF村戸靖彦が得意のスルーパス、RW舟山が左足できれいに決めたものだった。

前半は互角に素晴らしい戦いを挑んだが1-2とリードされた。ハーフタイムの早稲田は、監督から厳しく叱咤されていたのが印象的だった。結局、後半は0-3で負けはしたが、前半の善戦は高く評価されるべきである。前年卒業した西野が応援団長として大応援旗を振り、監督も兼ねていた。メンバーは、GK：水岡、FB：石崎・川田・HB：塩谷・田辺・森内、FW：藤川・塩谷・村戸・山田・舟山、SUB：沢田であった。



●富山大学蹴球部の思い出

1960年(昭35)4月、何名かの新入部員は上級生と一緒に活動を開始していた。高校卒業までに少し身につけたスポーツといえば、野球と柔道しかない私は、大学入学を転機として何か集中できるスポーツをとサッカーを選び、10月になってやっと入部した。当時の富大蹴球部は、北陸でサッカーを始めている3つの大学のうち最下位であったが、新入生にインターハイの経験を持つ故小泉嗣雄・堂坂芳彦(旧姓富田)の富山中部高出身者がいた。

ボールを蹴った経験のない私は、少しでも早くみんなに追いつき追い越したい一心で、毎日一人になっても練習に励んでいた。11月には中部日本大学選手権があり、経験1カ月の私も含め、11人ぎりぎりでの試合に臨んだ。親に買ってもらった新しいスパイクをはいた初めての公式戦は、2回の空振りもあって、初参加の中京大学に0-1で惜敗したことを今でもはっきり憶えている。未経験だけにチームメイトに迷惑をかけたとの思いから、翌年正月には、蓮町校舎の体育館で毎日一人で練習に励んだ。年度が変わって2年生になったが、北陸三大学の大会では、金沢大・福井大には全く歯が立たず、県内一般の選手権でも、ことごとく敗戦の憂き目にあっていた。

3年生になった時、新入生として富山中部高から江端博・沢田修が入部し、未経験者として出野俊次らが入ってきた。富山北部高・富山中部高・富山工業高の胸を借りてチームの強化を図り、合宿も試みた。精進の結果、金大に大接戦の末4-3でせり勝ち、8年振りで三大学の優勝を飾った。

4年生になった1963年(昭38)、富山中部高出身の黒崎哲夫らを迎え、春の合宿で汗を流した。その甲斐あって、北陸三大学では金大を6-0で一蹴、余勢をかって天皇杯全日本選手権県予選では、最強といわれていた富山クラブを破り、優勝戦には伏木クラブに3-1と快勝した。北信越大会では金大を延長で3-2と退けたものの、優勝戦では、新潟国体に向けてチームを補強していた新潟教員に0-4と完敗した。

その年の秋、中部日本大学選手権の当番校となり、富山中部高グラウンドを主会場として開催した。試合は南山大(準優勝)に0-1で惜敗した。12月には、全国大学選手権大会に出場、電気通信大を4-0で破って2回戦に駒を進めたが、東京教育大(現筑波大)に0-7と完敗した。

今振り返ってみて、1年先輩の根塚純一を主将として部員が団結し、練習に励んだことが富山大学蹴球部の第2期黄金時代を築き、次代へ引き継いだと自負している。

(齊藤 雄一)